

# 日本語における主語上昇変形と「は」・「が」

高 島 直 樹

## Subject Raising and the Particles *wa* and *ga* in Japanese

Naoki TAKASHIMA

### 1. 序

英語と日本語において、同じ現象と考えられる文間の関係がある。

- (1) I expect that Mary will come.
- (2) I expect Mary to come.
- (3) 田中は山田がばかだと思っている。
- (4) 田中は山田をばかだと思っている。

*Mary*, 「山田」は, (1), (3) においては埋め込み文の構成要素であり, (2), (4) においては母型文の構成要素になっている。この関係をとらえる規則として, つまり, (1), から (2), (3) から (4) を派生する規則として主語上昇変形 (Subject Raising) が提案されている<sup>1</sup>。この小論では, 日本語における主語上昇変形を認める立場で, 主語上昇変形を受ける埋め込み文における「は」・「が」の問題, そして, それと主語上昇変形の関係を中心に考察しようとするものである。

### 2. 日本語における主語上昇変形を認める根拠

2.1. Kuno (1976, pp. 24-29) は, 日本語に主語上昇変形を認める根拠として次のことを挙げている。まず, (4) においては, 「山田を」というように対格助詞「を」をとっており, 「山田」が埋め込み文の主語の位置にあるものではないこと, 第二に, 日本語では語順が比較的自由であるために, (5) から (7) の文に見られるように, 副詞は文中の様々な位置にあらわれる。

- (5) 愚かにも, 山田はそれを知らなかった。
- (6) 山田は, 愚かにも, それを知らなかった。
- (7) 山田はそれを, 愚かにも, 知らなかった。

しかし, (8) から (11) の文に見られるように, 埋め込み文を持つ文においては, 母型文の構成要

1. Postal (1974), Kuno (1976) を参照。なお, Chomsky (1973) はこの変形を認めていない。

素である副詞を埋め込み文の中に入れることはできない。

- (8) 愚かにも、山田は〔田中が天才である〕ことを知らなかった。
- (9) 山田は、愚かにも、〔田中が天才である〕ことを知らなかった。
- (10) 山田は〔田中が天才である〕ことを、愚かにも、知らなかった。
- (11) 山田は〔田中が、愚かにも、天才である〕ことを知らなかった。

(8) から (10) の文の意味は同じであるが、副詞が埋め込み文の中に移動した (11) は、(8) から (10) の文とは意味が異なるからである。このことから、(12) から (15) の文における「田中が」は、埋め込み文の構成要素であると考えられる。

- (12) 愚かにも、山田は〔田中が天才だ〕と思っていた。
- (13) 山田は、愚かにも、〔田中が天才だ〕と思っていた。
- (14) 山田は〔田中が天才だ〕と、愚かにも、思っていた。
- (15) 山田は〔田中が、愚かにも、天才だ〕と思っていた。

「愚かにも」が埋め込み文の中に入った (15) は、(12) から (14) の文と意味が異なるからである。しかし、「愚かにも」を「田中を」と「天才だ」の間に入れた (19) の文が (16) から (18) の文

- (16) 愚かにも、山田は田中を天才だと思っていた。
- (17) 山田は、愚かにも、田中を天才だと思っていた。
- (18) 山田は田中を天才だと、愚かにも、思っていた。
- (19) 山田は田中を、愚かにも、天才だと思っていた。

の意味と異なることから、(16) から (19) の文における「田中を」は、埋め込み文の構成要素ではなく、母型文の構成要素であると考えられる。第三に、かきませ規則 (scrambling rule) と呼ばれる規則によって、(20) の a, b の文に見られるように、文中の主語でない要素を主語の前の位置に移すことが可能である。

- (20) a. 山田は森田に田中を紹介した。
- b. 田中を、山田は森田に紹介した。

しかし、埋め込み文の主語を母型文の主語の前に移すことはできない。(21) と (22) の文では、意味が異なるからである。

- (21) 山田は〔田中が天才である〕ことを知らなかった。
- (22) 田中が、山田は天才であることを知らなかった。

そこで、(23)、(25) a の文について考えてみると、(23) にはかきませ規則を適用して (24) を派

生することができないのに対し、(25) a にはこの規則を適用して (25) b を派生することができる。

- (23) 山田は田中が天才だと思っていた。  
 (24) 田中が、山田は天才だと思っていた。  
 (25) a. 山田は田中を天才だと思っていた。  
       b. 田中を、山田は天才だと思っていた。

このことから、(23) の文の「田中が」は埋め込み文の構成要素であり、(25) a, の「田中を」は母型文の構成要素であると考えられる。第四に、次の (26) から (29) の文について考えてみよう。

- (26) 誰かがみんなを見張っていた。  
 (27) 誰かが〔みんなが死んだ〕ことを知らなかった。  
 (28) 誰かが〔みんながばかだ〕と思っている。  
 (29) 誰かがみんなをばかだと思っている。

(26) の文は、「みんなを見張っている誰かがいた」という意味の他に、「それぞれの人に対して、その人を見張っている誰かがいた」という解釈も可能である。しかし、埋め込み文を持つ (27) の場合には二番目の解釈はできない。同様に、(28) の場合にも最初の解釈、すなわち、「みんなをばかだと思っている誰かがいる」の意味しかないが、(29) の場合には、二番目の解釈、すなわち、「それぞれの人に対して、その人をばかだと思っている誰かがいる」の解釈も可能である。このことから、(28) の「みんなが」は埋め込み文の構成要素であり、(29) の「みんなを」は母型文の構成要素であると考えられる。第五に、(31) の文において、「彼」が「山田」を指示する時には、

- (30) 山田<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>を批判した。  
 (31) \*山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>を批判した。  
 (32) a. 山田<sub>i</sub>は〔自分<sub>i</sub>がみんなにきらわれている〕ことに気が付いていない。  
       b. 山田<sub>i</sub>は〔彼<sub>i</sub>がみんなにきらわれている〕ことに気が付いていない。

(31) は非文法的な文であること、そして、(32) においては、「自分」、「彼」両方が可能であることから、再帰化変形は主語と目的語の間では義務的であり、母型文の主語と埋め込み文の主語の間では選択的な規則と考えられる<sup>2</sup>。そこで、次の (33) から (36) の文をみれば、(34) と (36) の文法性の違いは、

- (33) 山田<sub>i</sub>は〔自分<sub>i</sub>が天才だ〕と思っていた。  
 (34) ?山田<sub>i</sub>は〔彼<sub>i</sub>が天才だ〕と思っていた。  
 (35) 山田<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>を天才だと思っていた。

2. (32) におけるように再帰化変形が選択的であるのは、母型文と埋め込み文の主語の間にだけ限られるものではないと考えられる。例文 (75), (77), (79), (81), 及び注 (14) を参照。

(36) \*山田<sub>i</sub>は彼<sub>i</sub>を天才だと思っていた。

(34) では「彼が」は埋め込み文の主語であり、(36) の「彼を」は母型文における目的語であると考えることによって説明が可能である。

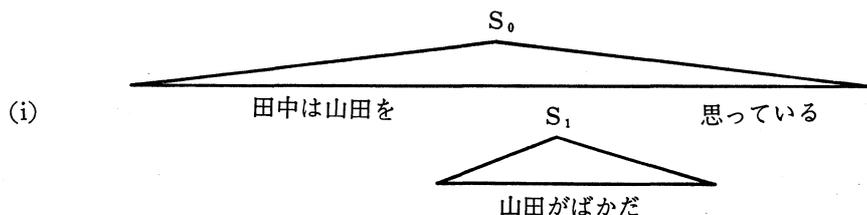
2.2. 以上の Kuno (1976) の議論から、(3) の「山田が」は埋め込み文の構成要素であり、(4) の「山田を」は母型文の構成要素であると考えられる。そして、この小論では、(4) の文は (3) に主語上昇変形 (埋め込み文の主語を母型文の目的語に上昇させる変形規則) が適用されて派生されるものとする<sup>3,4</sup>。

### 3. 主語上昇変形と埋め込み文における「は」・「が」

3.1. まず、Kuno (1972) における埋め込み文の「は」、「が」の分析をみる。Kuno (1972) は、埋め込み文における主語の消去という現象を考察することにより (42), (43) の仮説を提案している。

- (37) a. 僕は忙しい。  
 b.\*僕が忙しい。  
 c. ジョンは [φ 忙しい] と言っている。  
 d.\*ジョンは [自分/彼が忙しい] と言っている。
- (38) a. 僕は家族の中で一番忙しい。  
 b. 僕が家族の中で一番忙しい。  
 c. ジョンは [φ 家族の中で一番忙しい] と言っている。  
 d. ジョンは [自分が家族の中で一番忙しい] と言っている。
- (39) a.\*僕はメアリーをなぐった。ビルがなぐったのではない。  
 b. 僕がメアリーをなぐった。ビルがなぐったのではない。  
 c.\*ジョンは [φ メアリーをなぐった, ビルがなぐったのではない] と言った。  
 d. ジョンは [自分がメアリーをなぐった, ビルがなぐったのではない] と言った。
- (40) a. 僕は大学生だ。  
 b.\*僕が大学生だ。  
 c.\*?ジョンは [φ 大学生だ] と主張している。  
 d. ジョンは [自分が大学生だ] と主張している。

3. (4) の文は (i) の構造に同一名詞削除変形 (Equi NP deletion) が適用されて、埋め込み文の「山田が」が削除されることにより派生されるとする議論があるが、これに対する反論については Kuno (1976, pp. 29-39) を参照。



4. 英語においては、埋め込み文の主語の位置から母型文の主語の位置への上昇変形も提案されている (Rosenbaum (1967), Postal (1974)) が、井上 (1976) は、日本語ではこの規則は今までのところ提案されていないと述べている。

- (41) a. 僕は1940年に生まれた。  
 b.\*僕が1940年に生まれた。  
 c. ジョンは〔 $\phi$  1940年に生まれた〕ことを伝えた。  
 d. ジョンは〔自分が1940年に生まれた〕ことを伝えた。

(37) b. d., (39) a. c., (40) b., (41) b. の\*は、コンテストなしに考えた場合は容認不可能であることを示す。(37)においては、a. が埋め込み文になった c. では埋め込み文の主語は義務的に消去される。消去されなければ容認不可能な d. になる。(38)においては、b. が文法的な文であるのは、(37) b. とは違って総記 (exhaustive listing) の対象となる範囲が「家族の中で」によって示されているからである。そして、a. b. それぞれが埋め込まれた c., d. において、c. では埋め込み文の主語を消去できるが、d. では消去できない。(40)においては、今までの議論で言えば容認不可能になるはずである d. は、容認可能な文である。そして、埋め込み文の主語が消去された c. は、d より容認可能性が下がる。(41)においては、埋め込み文における主語が消去された c. も、消去されない d. もともに容認可能な文である。以上のことから、Kuno (1972, p. 295) は次の仮説をたてる。

- (42) The thematic NP-*wa* in the subject position in embedded clauses becomes NP-*ga* obligatorily. In other words, given NP-*ga* as subject of an embedded clause, its source is either NP-*ga* or NP-*wa*.  
 (43) In embedded clauses, NP-*ga* as subject cannot be deleted under identity with the matrix sentence subject if its source is NP-*ga*. It may or may not be deleted (subject to as yet unknown constraints) if its source is NP-*wa*.

すなわち、埋め込み文においては、主題の「名詞句+は」は義務的に「名詞句+が」に変えられる。そして、この「名詞句+が」を消去する変形は、義務的に適用されなければならない場合 ((37) c.), 選択的な場合 ((40) c., (41) c.), 適用できない場合 ((39) c.) があり、この規則の適用に関する制約は今のところわからないと言う。そして、埋め込み文の主語である「名詞句+が」が「名詞句+は」から派生されたものでなく、もともと「名詞句+が」である場合は、それが母型文の主語と同一指示であっても消去できないということである。そして、(42) の仮説は (44) b. の容認不可能を説明することができる。

- (44) a. ジョンはその本を読んだ。  
 b.\*これは〔ジョンは読んだ〕本です。  
 c. これは〔ジョンが読んだ〕本です。  
 d. これは〔ジョンは読んだがメアリーは読まなかった〕本です。  
 (45) 君は〔太郎が日本語ができる〕ことを知っていますか。

(42) の仮説により、埋め込み文に現われる「は」はすべて対照の「は」であることになる。更に、久野 (1973, p. 33) は、主題の「は」と中立叙述・総記の「が」の区別は埋め込み文では中和され、次の (45) の「太郎が」の「が」には総記の意味がないと言う。

3.2. 以上見たように、Kuno (1972), 久野 (1973) は、コンテキストを抜きにした容認性の判断に基づいて、埋め込み文における「は」, 「が」に対する仮説を提案していると考えられる。本論では、コンテキストを考慮に入れる立場から、この仮説を、主語上昇変形を受ける埋め込み文を持つ文を対象に検討する。

- (46) a. 太郎は [次郎  $\left\{ \begin{array}{l} \text{は} \\ \text{が} \end{array} \right\}$  ばかだ] と思っている。  
 b. 次郎はばかだ。  
 c.\*次郎がばかだ。

Kuno (1972), 久野 (1973) の分析に従えば、(46) c. がコンテキストなしには容認不可能な文であることから、a. の「次郎が」は「次郎は」に「は」→「が」転換規則が適用されて派生される。そして、この「が」には、述語が状態述語 (stative predicate) になっているにもかかわらず<sup>5</sup>、総記の意味がないということになる。a. の「は」がそのまま残るのは、対照の「は」の時だけである。つまり、a. の「は」には主題の意味がないことになる。しかし、コンテキストを考慮に入れば、(46) a. の文の「次郎が」の「が」は総記の意味を持ちうる。今問題にしている者、例えば、次郎、三郎、四郎が存在するコンテキストの中では、「次郎だけがばかだ。ばかなのは次郎だ、と太郎は思っている」という意味を持つと考えられる。すなわち、「太郎はある人がばかだと思っているが、それは次郎だ」の意味である。勿論、「次郎が」の「が」が中立叙述の意味を持つ場合も可能である。

3.3. 次に、主題の「は」は埋め込み文の主語の位置では「が」に変わるという Kuno (1972), 久野 (1973) の仮説の検討に入る前に、主題の「は」、対照の「は」、総記の「が」について述べる。Kuno (1972), 久野 (1973) は、主題、対照の「は」の持つ機能の違いについては述べているが、共通点には触れていない。北原 (1976, pp. 75-78) が述べているように、「は」の本義はとりたてである。そして不特定多数の中からとりたてが主題の「は」であり、特定有限数の中からのとりたてが対照の「は」である。とりたてという機能をその本義として、主題の「は」と対照の「は」が共通に持っていることから、主題の「は」か対照の「は」かという問題に対する母国語話者の微妙な判断の違いがでてくると考えられる。例えば、(47) において、「本は」と「勉強は」の「は」が対照

- (47) 私は週末には本は読みますが、勉強はしません。

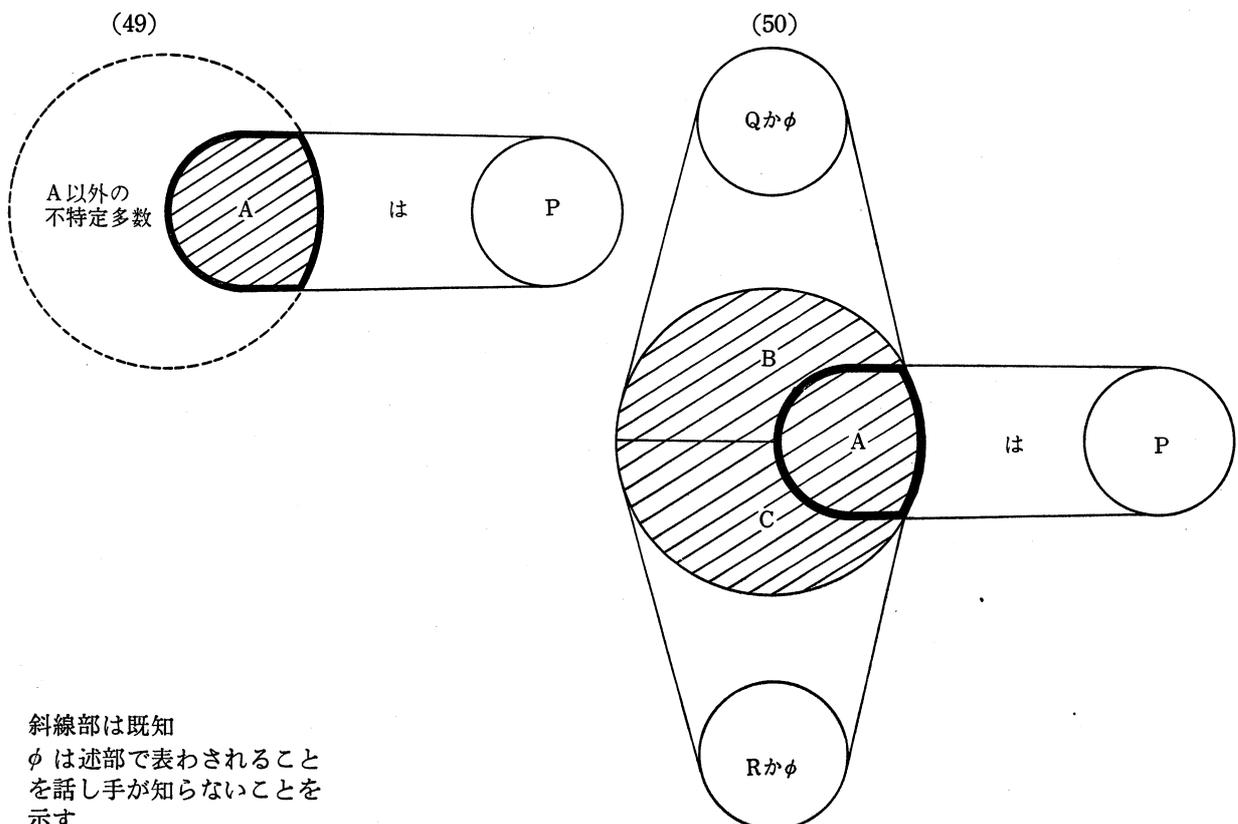
の「は」であることは、はっきりしているが、問題は「私は」、「週末には」の「は」である。久野 (1973, pp. 30-31) は、「一つの文には、ただ一個の主題しか現われ得ない。もし一つの文の中に、二つ或いは、それ以上の「ハ」が現われる場合には、最初の「ハ」だけが主題を表わし、残りは対

5. (i) の例のように、状態述語と共に使われる主格助詞「が」を伴った主語は、総記の意味を持つ。(Kuno (1978), p. 250) ただし、述語が状態述語であっても、主語に数量詞が含まれる (ii) のような時には、中 (ii) この学校の学生の大部分が独身です。  
 立叙述の解釈も受けうることを Kuno (1972, p. 275) は指摘している。

照を表わす」と述べている。しかし、(47)については、久野自身も、「週末には」は比較対照の意味合いが極めて強いと述べており、比較対照の意味しかないとは言っていないところに、主題の「は」と対照の「は」についての微妙な判断の揺れが見られる。ここで、もう少し突っ込んで考えてみると、主題の「は」は不特定多数の中からとりたてであるというのは、述部はとりたてられたものについて述べるということであり、それ以外の不特定多数については何ら関係しない。すなわち、無関心であるということである。そして、主題としてとりたてられるものは、話し手が、聞き手が知っていると考えているものである。例えば、(48)の「は」が主題の場合、「私」以外の何者につ

(48) 私は昨晚推理小説を読んだ。

いても述べておらず、「私」についてのことだけを述べている文である。それに対して、特定有限数の中からのとりたてである対照の「は」は、「は」によってとりたてられたものだけではなく、それ以外の特定有限数についても、同時に、述べるものである。例えば、太郎、次郎、三郎が同居しており、太郎が(48)の文を言ったとしよう。「は」が対照の「は」の場合には、(48)の文は「太郎が推理小説を読んだ」ことだけではなく、更に、「次郎、三郎は何か別のことをしていたか、あるいは、何をしていたのか知らない」ことを意味する。これを図示すると、主題の「は」は(49)、対照の「は」は(50)になる。とりたてられるものをA、述部をPとする。



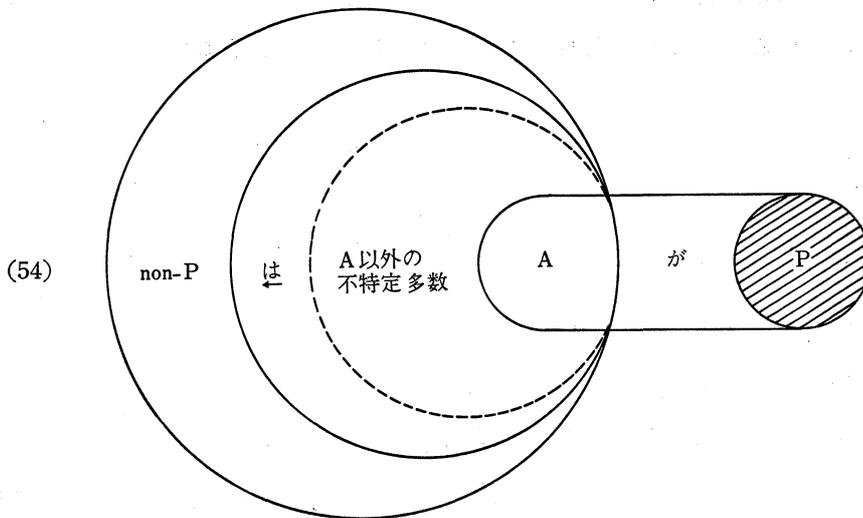
次に、総記の「が」について述べる。(51)の「が」が総記の「が」の場合、(51)は(52)に言い

- (51) 私が推理小説を読んだ。  
 (52) 推理小説を読んだのは私だ。

換えることができることからわかるように、推理小説を読んだのは不特定多数の中の私だということであり、それと同時に、私以外の不特定多数は推理小説を読まなかったということを意味する。一般化して述べると、(53)は「PはAだ」に言い換えられることから、Pであるのは不特定多

- (53) AがP。

数の中のAだ、すなわち、Pであるのは不特定多数の中のどれかということを一挙するものであり、それと同時に、A以外のものとPとの結びつきを否定するものである。既知、未知の観点から言うと、Pの部分は既知であり、Aは既知の場合と未知の場合があるが、いずれの場合もAとPの結びつきは未知である。これを図示すると(54)になる。



3.4. 北原(1976, p. 77)は、久野(1973)を批判して、一つの文に二つ以上の主題があっても論理的に矛盾するものではないと言う。そして、(47)の文について、「私は」は動作の主体についての主題であり、「週末には」は動作の行われる時についての主題であると言う。更に、二つ以上の「は」が同一文内にある場合は、最初の「は」だけが主題であり、残りは対照の「は」であるという久野(1973)の仮説も絶対的なものではないと言う。例えば、いつもある所へ行っている人が次の文を言ったとする。最初の「は」は対照であり、次の「は」は主題の「は」であると言う。ここ

- (55) 今日は私は行かない。

